

# ある古典

大村伸一

「古典ライブ」というサイトがあって、暇なときに覗いていた。

最初、「古典」ならずで過去の作品のはずで、その「ライブ」など意味が分からないと思い、それでかえって興味を惹かれたのだった。それでも想像していたのは、古典作品のライブ朗読をストリーミング配信する、そんなサイトだった。昼に会員登録をして、夕方には登録完了だというメールが届いた。このサイトでは会員の身元をきちんと確認するので時間がかかるのだという登録画面の文面は本当だったらしい。そしてログインすると、私の想像が全く間違っていたことがわかった。

このサイトは、誰も知らない古典を発掘し、紹介するのが目的なのだという。誰も知らない古典など、言葉の定義の段階で矛盾を起こしているように思えたが、サイトに誇らしく公開されている「これまで発掘した古典のリスト」には「源氏」「竹取」「近松」「里見」「歌姫」「怪人」などありふれた古典が並んでいた。説明を読むと、これらの古典は十年あまり前から今までに発見されたものであり、それ以前には誰もその作品の存在自体知らなかったのだという。

冗談サイトだと納得した私は、たまにそこを覗いてみるようになった。良寛作の「奥の細道」や江戸川乱歩の「武器よさらば」などは今でも何か違和感が残っているが、結局、二週間もすれば昔から知っている古典としか思えなくなってしまった。

それでも、冗談でなく本当なのかと思い始めたのは、夏目漱石という作家の「ころも」という作品がリストに加えられたときだった。それまで夏目某という作家など私は知らなかったし、文学の素養を持つ友人達に尋ねても同じだった。それが、リストにその作品が並んで一週間もしないうちに、町の書店には夏目の作品を集めたクラシックコーナーができ、次々と発掘される夏目の作品は短編、長編さまざまで、一月後にはどの図書館に行っても、夏目の本は何十冊もあるのに全部貸し出されていて見ることもできないというほど人気になっていた。来年の中学の教科書には夏目が採用され、入試の必須作品になると新聞にも書かれた。

夏目は百年ほど昔の作家なのだという。そんなに昔の小説をどうやって「発掘」したのかは判然としないが、確かに夏目某という作家について二ヶ月前には誰も何も知らなかったのに、

あのサイトで紹介されたとたん、いわゆる古典の一つになってしまったのだから「古典ライブ」という名前やその目的は本当のことなのかもしれない。

そもそも「発掘」とは何をしているのだろうか。何も知られていない過去の作品や作家をどうやって見つけ出しているのか、私には想像もつかなかった。確かにサイトに掲載されている作品が書かれた経緯や作家の履歴を見て、それを確認しようと思えば誰でも容易に確かめられた。作者と関係のある土地に残された古文書や原稿、出版されていれば奇跡的に残されていたとされる書籍さえもこの手で触れることができた。国立図書館の書庫の奥深くに秘蔵されていた一冊という例もいくつもあった。そして、それらの作品の文学的価値については、いつのまにか誰もが認めるほどに重要だと認識されていた。だから間違いなくそれらの作品は古典なのだが、その証拠がどれだけあろうとも、それではそれが何故、それまで誰の目にもつかなかったのだろうか。良くわからないことは後から後から浮かんできた。

その「古典ライブ」に私の名前が出現した時は特に驚いた。二百年前の作家ということだから私のことではないのだが、同姓同名の作家がいたなど聞いたこともなかった。その過去の作家の名前が紹介されて一ヶ月ほど後に、その作者の最初の発掘作品が公開されると私の驚きは増した。それは、私がたまたま趣味で書いていた小説と同じ「文明開化殺人事件」という題名だったのだ。私の書いていた話は、丁度二百年前に起きた殺人事件を取り上げたもので、それ以外の内容は完全に私の創作だった。小説を書く為に百を超える資料を読み漁ったが、その中にそんな題名の小説はひとつもなかった。偶然ということになるのだろうか、その発掘された作品もまた同じ事件を題材としていて、庶民の視点から描かれ、当時の風俗を知る為にも貴重な作品だと評されていた。奇妙な一致に興味を掻き立てられたが、実際に出版された本を読んでみると、内容は全く違うものだったので胸を撫で下ろした。

それから三ヶ月ほどして、私の次の小説「明日、月で会いましょう」を書き終えた頃、時を同じくして「古典ライブ」でも、あの私と同姓同名の作家の新しい小説が発掘されたというニュースがアップされた。当時にしては珍しい冒険未来小説で、題名は「明日、月で会いましょう」だというのだ。私の作品はどこにも発表していないのだし、そもそも恋愛小説だ。内容が違うのは明らかで、出版された本を読むとやはり私のものとは違っており、盗作だと訴えるわけにもいかない。

おそらく、すべては私の身近にいる誰かのいたずらなのだろう。だとしても、直接尋ねてみたところで正直に答えてくれるわけもないので、私は騙されたふりをして、騒ぎ立てることはしなかった。サイトの会員一覧を見ても、私の知り合いは一人もいなかった。偽名を禁じられ

ているので、つまり知り合いの知り合いが工作しているのだろう。

私は一週間の休暇を取り、誰にも行く先を告げずに旅に出た。どこに行くかはそのときの気分で決め、とある地方の駅に着いてから電話帳でランダムに選んだホテルに泊まった。そして、三日間をかけてひとつの小説を書き上げた。題名は「海賊と数学者」。女海賊と彼女が襲った船に偶然乗り合わせた数学者との哲学的な対決を描いている。これは私の友人たちも絶対に知りえないし、このホテルの従業員ですら、私の原稿を盗み読むことはできないように、原稿を誰からも見えないように体で隠しながら書いた。

予定を一日早め自宅に戻り、久しぶりに「古典ライブ」にアクセスしてみると、私と同姓同名のあの作者の小説がまた発掘されていた。「海賊と数学者」という題名はまたもや私の書いた小説と同じだった。信じられなかった。それで、最初に戻ってもう一度この作家の「文明開化殺人事件」を読み直してみると、以前はまったく違っていたはずなのに、今回は私の書いた「文明開化殺人事件」と一言一句同じ小説に変わっていた。あわてて「明日、月で会いましょう」を読み直すと、こちらは前半は私の小説と同じ文面だったが、後半はまだ違う小説のようだった。

何か非常に組織的で巧妙な罠にはまってしまったようだった。誰が何のためにこんなばかげたことをしているのだろうか。考えたところで分かりはしないのだから、私にできることはもう一つしかなかった。

「古典ライブ」のサーバーはネット上のどこかに存在する。その場所を知っている者は誰もいないだろう。しかし、管理者がどこにいるのかは分かるし、直接会って話することも不可能ではない。「古典ライブ」の管理者は自分の連絡先をサイトに明記していたので、私はさっそく電話をかけ、直接会う約束をとりつけた。彼の家は隣の県の大きな都市にあり、車で行っても二時間もかからなかった。案内された部屋には書類がうずたかく積まれ、何かの研究室という風情があったが彼自身はどこかの機関の研究員などではなく、引退した飛行気乗りだと自己紹介した。古典文学というものに興味を持ち、もう三十年あまり研究を続けている。サイトを立ち上げたのは本当に好奇心からで、すべてが趣味なのだという。

「世界のあちこちを旅して、意外な国でこの国の古い誰も知らない文献を見つけ出したことがいく度もありました。この国にいたのでは永遠に知り得ないたくさんの古典が、世界には無数にあるのです」

それが「古典ライブ」の始まりだったのだという。

「実は私が古典にされているのです」

管理人の話を一通り聞いてから、私は自分の問題を打ち明けた。経緯を話すと管理人は少しうんざりしたように、それまで浮かべていた微笑みを消してこう言った。

「時々そういうことを言う人がやってくるのです」

どうも私の話をまったく信じていないようだった。この男はあの罨に関与していないのかも知れないし、あるいは私を騙すため特に雇われた役者なのかもしれない。

「一年ほど前にも、なんだっけ、夏目とかいう人が、同じようなことを言って来ましたよ」話によると、夏目は盗作されたと幾度もうるさく抗議に来ていたらしい。結局は管理人に説得されて、それ以来姿を見ていないと言う。

「自分の書いた原稿だと言って、バッグからあふれるほどの紙くずを持って来たこともありました。なんの証拠にもならないんですけどね。そうだ、彼が自分を写した写真もありますよ」

見ますかと言って持ってきた写真は「古典ライブ」にアップされている夏目漱石の写真と同じ格好をして斜め前から撮影した、同じ顔の男の写真だった。こちらは最近撮ったらしくカラー写真だというところが違うだろうか。

「年に一人か二人ぐらい、来ますね。みんな同じように、自分の書いたものが古典として発掘されたものと同じだから『古典ライブ』は盗作だと言うんです。そんなことは不可能でしょう。彼らを書くより何百年も前に書かれていたのだから、盗作は彼らの方に決まっています。文学に入れ込みすぎて精神状態がおかしくなり、自分を昔の作家と同一視してしまっているんでしょうね。彼らは自分が見た作品を無意識のうちに真似てしまっているんでしょう。かわいそうなものです。だから、おおごとにはしていません。これも、ここだけの話にしといてください。あ、勿論あなたがそれとは違うのは分かってますよ」

どうも、この管理人は本当にそう思い込んでいるようだった。この男は何も知らないと分かったので、話題を変えてみた。

「発掘というのは、どういうやり方なんですか」

古典になる作品や作家を誰かがこの管理人に教えているはずだった。そいつが、この罨の仕掛け人なのだろう。そっちをたどっていけば、黒幕が分かるはずだ。

「あまり教えたくはないんだけど、本当に発掘なんです。最初にお話ししましたが、この国の人間だけが知らない書物が、世界中に埋もれています。世界のどこかの田舎で古書の市が立つと、たいてい、大陸の様々な言語で印刷された本の山の底に、我らが古典の手書きの綴じ本が濡れて固まった状態で見つかります。あるいは売れた本を包むための新聞紙の代わりに、バラされた書物の一頁が使われていたりするものです。かつて、かの国の権力者たちがこの

国から黄金を持ち出す時、非常に丈夫で破れず、水にも強かったこの国の書物を、黄金を保護する資材として利用していたと言われていました」

彼は自ら飛行機を飛ばし、そのような悲惨な運命にある古典を探し、救済しているのだと言う。間に仲介者はいなかった。勿論、それが真実かどうかは分からないが、管理人がそれを信じていることは分かった。これでは黒幕を暴くことはできそうになかった。真実は明らかにできないのだろうか、失望した表情を知らず知らず浮かべていたのだろうか。管理者はなぐさめるように言った。

「もしもあなたが信じているように、自分の作品が誰かに盗まれ古典として生まれ変わったのだとしたら、それを書いたのがあなたであるという栄誉は得られないかも知れませんが、大勢の人に読まれることになったという点で、結局は作者にとっても喜ばしいことではないでしょうか。『古典ライブ』で取り上げなければ存在したことすら誰にも知られなかった作品が、古典と言う権威と認知を得るのです。誰の仕業であってもそれは感謝すべきことです。抗議する筋合いではないでしょう」

私が強引に盗作の疑惑を主張しなかったからか、管理者は私の立場を理解して慰めてくれたようだった。彼の言うことは理にかなっていた。私には反論のしようもなかった。

私は、貴重な時間を割いて話を聞いてくれたことに礼を言い彼の家を後にした。しかし帰り道では疑問が消えなかった。管理者の言うように、私の書いたものが過去から来た古典であるなら、それを書いた私は誰なのだろうか。大陸の様々な言語で印刷された本の山の底で、濡れて固まった状態の私は見つけられるだろうか。あるいは売れた本を包むための新聞紙の代わりに、バラバラにされた私の身体が使われていたりするのだろうか。そんな馬鹿げた考えが頭の中で渦巻いていた。

そして、自分の家に戻ると、書きかけだった二百年後に起きる「古典ライブ」という架空のサイトの話を書き終えた。サイトとかネットとかの架空の用語の意味は自分でも完全に理解できているわけではない。まして、こんな話を他の人間が読んで分かるわけがないと、思いながら私は最後に題名を書いた。

「ある古典」